

# 令和2年 冬季農談会資料

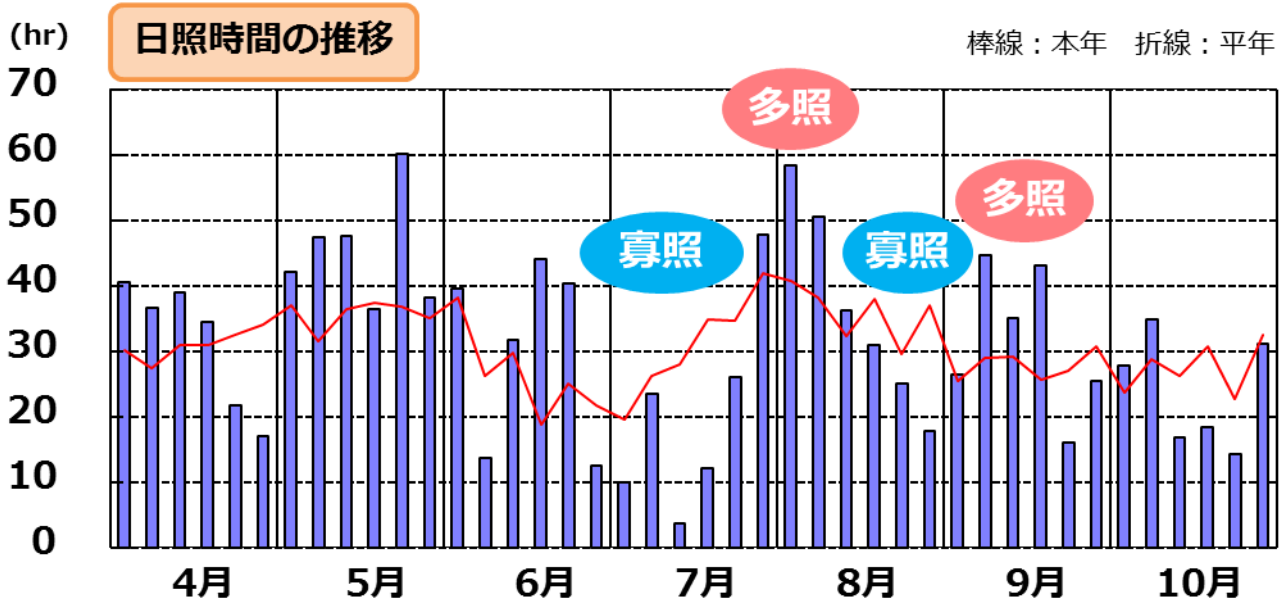
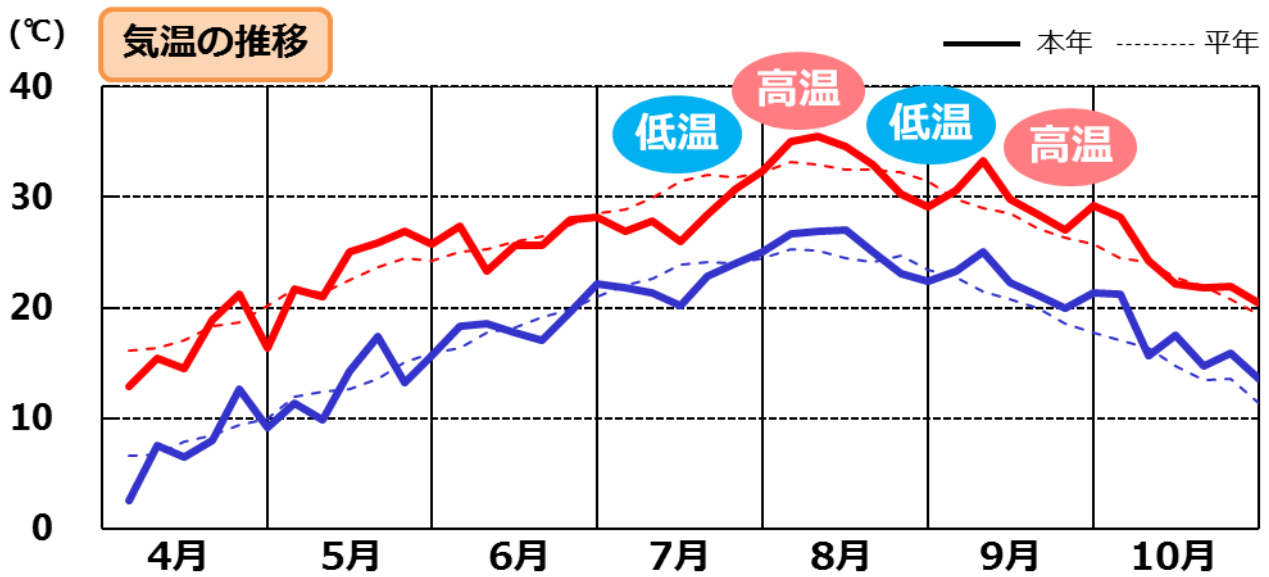
JA おうみ富士

- I 水稲 . . . . . 1～7 ページ
- II 小麦 . . . . . 8～9 ページ
- III 大豆 . . . . . 9 ページ
- IV 園芸作物 . . . . . 10～13 ページ

# I 水稻

## 1. 令和元年産米の概要

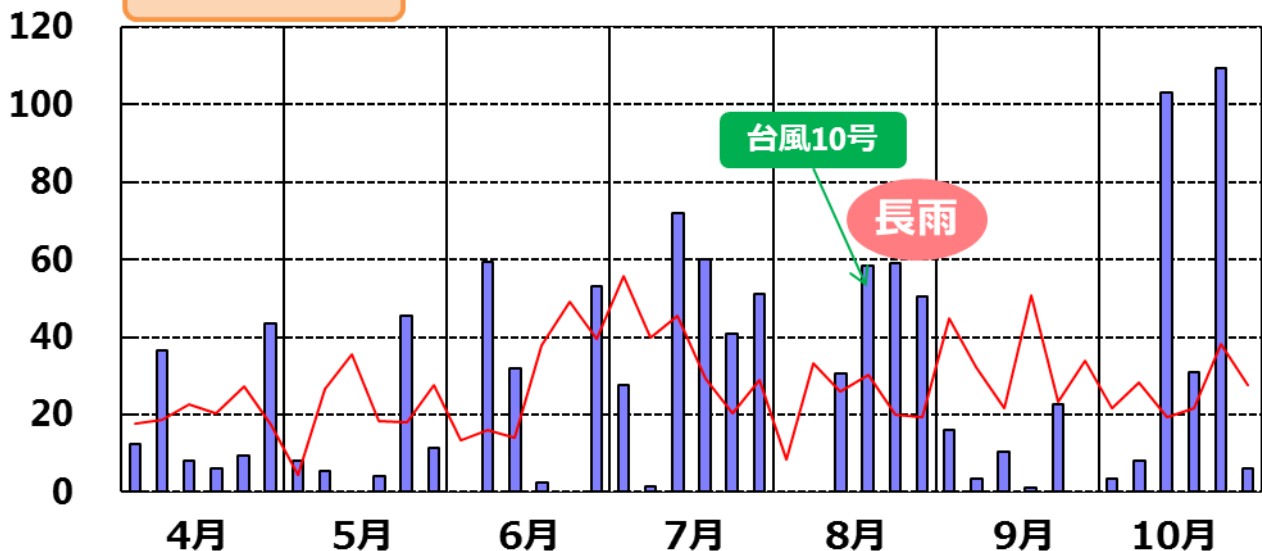
グラフ 上 最高気温 下 最低気温



(mm)

### 降水量の推移

棒線：本年 折線：平年



#### (1) 作柄

令和元年産の品質概況は、7月上中旬の低温と日照不足から一転、梅雨明けから8月上中旬まで猛暑が続いたほか、台風10号による暴風雨、8月下旬には低温と日照不足になるなど、気象変動が大ききな年となりました。

◆全もみ数は、6月下旬以降の日照不足の影響で穂数がやや少なくなり、1穂当もみ数が平年並みとなったことから「やや少ない」となった。

◆登熟は、8月中下旬の日照不足による影響がみられたものの、出穂期以降おおむね天候に恵まれたことから、「平年並み」となった。その結果、前年に比べて低収傾向になり、12月に発表された作況指数は、全国で「99」(528kg)で「平年並み」となり、滋賀県では「98」(509kg) 湖南が「98」(517kg)で、「やや不良」となった。

#### (2) 管内の品質（1等比率）の状況

表-1 J Aおうみ富士の品種別1等比率の推移 ※個袋検査のみの数値 (%)

品種	R1年産	H30年産	H29年産	対比 (R1/H30)
コシヒカリ	38.8	33.8	57.1	114.7
キヌヒカリ	16.6	25.8	48.8	64.4
みずかがみ	58.9	77.7	71.4	75.8
秋の詩	67.5	48.7	64.6	138.6
日本晴	77.3	22.7	35.4	340.5

令和元年産の品質概況は、早生品種は、8月上旬～中旬の高温により、「コシヒカリ」はもとより、高温登熟性を持つ「みずかがみ」においても白未熟粒が平年より多くなりました。中生・晩生品種「秋の詩」「日本晴」は、8月中旬以降の台風や低温、長雨、寡照により、不稔や穂ずれ、登熟不良により品質低下が見られました。

表－2 J Aおうみ富士の検査2等以下の理由

品種名	主な等級理由（2等以下の割合）
コシヒカリ	心白及び腹白（44.5%）・整粒不足（30.5%）
キヌヒカリ	心白及び腹白（71.9%）・整粒不足（16.3%）
秋の詩	着色粒（46.6%）・整粒不足（21%）
みずかがみ	青未熟（27.3%）・整粒不足（27.2%）

※<sup>はらじろ</sup>腹白粒…基部の白色不透明な部分の大きさが、その粒長の3分の2以上でかつ、粒幅の3分の1以上のもの

### (3) 病害虫の発生状況

いもち病は、葉いもちは全体的に発生量はやや少なく、穂いもちの発生量は、平年並みとなりました。

紋枯病は、平年並みの発生量となりました。

カメムシ類は、平年並みの発生量となりました。

## 2. 令和2年産の米づくりの取組

### (1) 品質向上対策

近年、異常気象による収量や品質が低下しており、安定した収量、品質を確保するには、基本技術の励行が重要です。

#### 1) 土づくり

稲の生育や籾の登熟を良好にするためには、収穫期まで活力のある根の維持が必要です。土づくり肥料の施用や深耕（15cm以上）の実施等、しっかりと土づくり（とれ太郎）をしましょう。

○県の調査では、深耕（15cm以上）されているのは、41%に過ぎず、深耕（15cm以上）されている場合、収量が増収する結果がでてます。

○土づくり肥料の効果としては、アルカリ分は、pHを上げる役割があり、カドミウム抑制対策に繋がり、リン酸は、稲の分げつ促進等に繋がり、ケイ酸は、光合成能力の向上、いもち病抵抗性、倒伏防止、根腐れ病防止等の効果があります。中でもケイ酸は稲にとって重要な養分であり、窒素の10倍吸収すると言われます。ケイ酸を多量に吸収した水稻は、根の活力が旺盛になって丈夫に育つとともに、葉が直立し受光態勢が良くなるため光合成が盛んになり、登熟が向上します。また、根が丈夫になり、生育後期まで根の活力が保たれ、登熟が向上し、収量に結びつきます。

#### 2) 過繁茂防止と必要茎数の確保

生育前半の過繁茂を防止することが重要で、適正な栽植本数や、水管理に努めましょう。

#### 3) 茎葉の活力維持

良好な籾の登熟には、葉の光合成を活発にし、収穫直前まで籾へ炭水化物を送り続けることが大切です。高温時における登熟期の栄養不足を回避するため、生育に応じた穂肥を施用しましょう。具体的には、基肥一発型肥料の場合は、高温傾向ですと肥料切れする恐れもありますので、葉色が薄い場合は、土質等も考慮し、出穂期前に窒素成分1kg/10a（NK化成C20号使用の場合は、5kg/10a）程度穂肥の散布を行いましょう。また、出穂前後各3週間は湛水管理を励行しましょう。特に、中干し後に高温で降雨が少ない場合は、水不足には注意が必要です。

#### 4) 品質低下防止

登熟期の早期落水は、品質を低下させるため、収穫直前まで間断かんがいを実施しましょう。また、収穫適期を過ぎると胴割れや穂発芽などが発生し、品質の低下を招くため、適期収穫（籾黄化率85～90%が目安）に努めましょう。

#### (2) カドミウム対策

カドミウムの含有量が0.4ppmを超えるお米は食品衛生法で汚染米となり、米代金を返金しなくてはならない上に自己の費用で回収、廃棄処分をしなければなりません。令和元年産は63点(集落)を調査し、含有量を超える汚染米は発生しませんでした。令和2年産以降も、下記のカドミウム吸収抑制対策を実施しましょう。

- ① 土づくり肥料「とれ太郎」を散布し、土壌PHの適正化(6.5以上)を図りましょう。
- ② 管理対策として出穂前後各3週間の湛水管理(水深約3cmの水張り)を徹底しましょう。

#### (3) 食味

食味向上対策として、食味分析に取り組みました。結果につきましては、表-3のとおりです。食味値は、アミロースやタンパク質などの含有成分を測定し100点満点で表示されるもので数値が高いほどおいしいと言われ、80点以上がおいしいと評価されます。

また、おうみ富士「米」食味コンテストを昨年引き続き開催する予定です。表彰の内容につきましては、夏季農談会にてご報告致します。

表-3 食味値結果

単位：点

年度	品種	全サンプル	80点以上	80点未満	平均点
R1	コシヒカリ	2,324	963	1,361	78.5
	キヌヒカリ	2,207	220	1,987	73.8
	みずかがみ	635	377	258	79.9
	秋の詩	2,105	863	1,242	78.6
	日本晴	193	41	152	75.0
	合計	7,464	2,464	5,000	77.2
H30	コシヒカリ	2,960	2,299	661	82.5
	キヌヒカリ	2,153	1,010	1,143	77.1
	みずかがみ	388	192	196	78.7
	秋の詩	2,756	1,913	843	79.4
	日本晴	301	72	229	75.5
	合計	8,808	5,641	3,167	81.0

#### (4) 各品種の求める品質について

##### ・コシヒカリ

ご存知の通り、全国的にも管内でも一番多く作付けされている主力品種です。需要も多く、価格的にも高単価で取引される品種ですので、1等米を目指した米作りが必要となります。基本技術を励行し、収量もちろんです。高品質な米作りを意識した栽培管理をお願いいたします。

##### ・キヌヒカリ

コシヒカリの性質を受け継いだ良食味の早生品種です。外食向けや量販店からの引き合いも強く、多くの需要があります。つきましては品質より特に収量を重視した栽培管理と生産コストを抑えた施肥設計等に取り組んで頂きますようお願いいたします。

・みずかがみ（環境こだわり栽培必須）

平成 25 年より本格的に栽培が始まった滋賀県育成品種です。暑さに非常に強く、高温化でも未熟粒の発生が少なく品質が安定しています。また、過去には、3 年間連続して米食味ランキングで特 A を獲得し、主に消費者等の需要が高い品種ですので品質の高い米の生産をお願いします。また、穂の長さが短い特性がありますので、極端な疎植はせず（50～60 株／坪）、穂数を確保した栽培をお願いいたします。

・秋の詩

良質・良食味の中生品種です。粒が大きく適度な粘りと甘さがあり、一定の需要がある品種です。滋賀県育成品種でもあり、コシヒカリと同様に高品質なものを求められておりますので、高品質栽培を心がけた栽培管理をお願いいたします。

※具体的な施肥設計につきましては、令和 2 年産栽培こよみをご確認下さい。

表－4 主要品種栽培面積

区域	品種	R1 年度	R 2 年度計画	対比 (R1/R 2)
JA おうみ富士	コシヒカリ	722.6ha	733.0ha	101.5
	キヌヒカリ	594.5ha	603.0ha	101.4
	秋の詩	507.7ha	492.0ha	96.9
	みずかがみ	199.9ha	210.0ha	105.0

(5) 個袋出荷分の「環境こだわり米」仕分けについて

個袋出荷につきまして、昨年同様、可能な限り生産者の要望に応えられるよう品種の限定及び事前に確認した必要数を把握し、環境こだわり米の区分管理を行えるよう対応したいと考えています。また、環境こだわり米区分管理を行うのは個袋出荷のみとなります。カントリー出荷では環境こだわり米区分管理が行えませんのでご理解のほどよろしくをお願いいたします。

(6) 令和 2 年産の飯用米及び販売用環境こだわり米品種

環境こだわり米 コシヒカリ、キヌヒカリ、秋の詩（個袋出荷のみ）

環境こだわり米 みずかがみ（こだわり栽培のみ） 4 品種とさせていただきます。

(7) 令和 2 年産のみずかがみの共同利用施設（育苗・カントリー）の対応について

JA おうみ富士では、育苗センターは令和元年産同様「みずかがみ」対応を実施し、カントリーについては、野洲カントリーエレベーターのみの取り扱い予定をしています。詳細は運営計画でお知らせします。

(8) 飼料用米（吟おうみ）について

令和元年産飼料用米から、多収性品種として産地交付金の対象となる「吟おうみ」に品種転換しましたが、令和 2 年産より産地交付金の要件が複数年契約を締結することと変更になりました。現在、複数年契約が出来るよう準備をしております。条件等がまとまりましたら、作付け農家へお知らせしますので、よろしく申し上げます。

(9) オーガニック米栽培（有機米栽培）について

滋賀県では、環境こだわり栽培の深化として、オーガニック（有機栽培）にて生産

された米と茶の普及に取組み、環境こだわり農産物のブランド力の向上を推進されております。当 JA においても、付加価値の向上を目的とし、試験栽培に令和元年度から取組みました。R 2 年産につきましては、広く栽培希望者を募らせていただき、農家の皆様と共に取組んでまいりたいと考えておりますので、ご協力をよろしくお願い致します。

(10) 米政策の見直しの概要

表-5 経営所得安定対策

	項目	対象者	H29年産	H30年産	R1年産	R2年産
1	水田活用の直接支払交付金 (対象作物) 麦 大豆 飼料用米 米粉用米 WCS 加工用米	販売農家 集落営農	麦・大豆、飼料作物 35,000円/10a			
			飼料用米、米粉用米 収量に応じ55,000～105,000円/10a H29年産より二毛作助成、そば・なたねは産地交付金へ 加工用米 20,000円/10a			
2	産地交付金 県・市で設定	販売農家 集落営農 助成内容によりかわる	[県設定] 麦・大豆生産性品質向上助成(団地化型) H29 5,090円/10a H30 4,860円/10a R1 4,630円/10a(単価調整あり) R2継続、単価未定			
			[市設定] 戦略作物および一般作物(野菜・花き・果樹等)に対する助成	[市設定] 戦略作物および高収益作物(野菜、花卉、果樹等) その他市が定める作物に対する助成 R2継続、単価未定		
3	畑作物の直接支払交付金 (対象作物) 麦・大豆 そば・なたね	担い手※	麦1等Aランク6,690円/60kg H28年産比 +280円		麦1等Aランク 6,740円/60kg H30年産比+50円	麦1等Aランク 6,510円/60kg R1 年産比▲230円
			大豆 1等 9,940円/60kg H28年産比 ▲2,580円		大豆 1等 10,830円/60kg R1年産比 +890円	
		非担い手	×			
4	収入減少影響緩和対策 (対象作物) 米・麦・大豆 収入減少額の9割支援 米・麦・大豆の収入を合算) 負担割合 国3:生産者1	担い手	法改正H27.4.1施行 経営規模要件 無 加入者のみ			

※ 担い手とは、「認定農業者」、「集落営農組合」および「認定新規就農者」となります。

(11) 収入保険制度

収入保険制度とは、農業経営全体を対象としたセフティーネット対策として、青色申告を実施している全農業者(個人・法人)を対象に、全ての農業経営品目についての農産物の自然災害に加え、価格低下に対応して収入減少を補てんするための制度です。尚、類似する制度として現行の農業共済・収入減少影響緩和対策(ナラシ対策)との併用はできず収入保険制度との選択となります。自らの経営に最適な制度を適

切に選択できるよう、保険料や補てん金などを比較できるように、NOSA I ホームページ上で簡易なシュミレーションソフトで確認できます。

令和2年1月から、掛金の安いタイプ、発動基準（基準収入の9割）は変えずに受け取る保険金の額を、過去の収入減少の実態を踏まえて小さくすることで、保険料が最大で約4割安くなるタイプがスタートします。 ※農業共済組合にご確認下さい。

#### (12) 令和2年度環境保全型農業直接支払交付金の制度見直しについて

##### ○全国共通取組の拡充と単価見直し

全国共通取組 有機農業、カバークロップ、堆肥の施用

追加 リビングマルチ、草生栽培、不耕起播種、長期中干し、秋耕

##### ○地域特認取組の支援対象作物の見直し

「麦、大豆、小豆、そば、飼料作物（飼料用稲など）花」は全国共通取組または認証制度を活用して推進することとし、地域特認取組の対象外となります。

※大豆については、別の支援策を検討されています。

・緩効性肥料の利用および長期中干しの取組については、引き続き支援対象となるように、国に申請を県が行っています。

##### ○有機農業は有機JAS認証習得相当の実施が要件化

・取組ほ場で、継続して化学肥料や化学合成農薬を使用しないことが要件になるため、毎年ほ場が変わる取組等は対象外となります。

・土壌分析が必要になります。（分析項目、点数、頻度等は不明）

##### ☆国際水準GAPの取り組み

※GAP（Good Agricultural Practice：農業生産工程管理）とは食品安全、環境保全、労働安全等につながる取組です。

※次年度に引き続きGAPに取り組まれる方は、昨年同様GAP理解度・実施容認書の提出が必要です。（※平成30年度にGAP研修会に参加された方は、令和2年度研修会に参加する必要があります）

#### (13) 米の生産目標について

主食用米の需給バランスをとるために、引き続き、生産調整に取り組む必要があります。市町農業再生協議会から示される主食用米の生産目標を守って、需要に応じた米生産に取り組んでいただきますようお願い申し上げます。

#### (14) 農地利用集積円滑化事業について

農地の契約に関する関連法律の改正（農業経営基盤強化促進法他）が行われ、農地中間管理事業との統合一体化により、本年4月1日より従来、当農協が仲介役（転貸人）として貸借する農地利用集積円滑化事業ができなくなりました。今後は、滋賀県農地中間管理機構（公益財団法人滋賀県担い手育成基金）を仲介役（転貸人）に農地中間管理事業を活用して契約を結ぶか、仲介役を入れずに直接耕作者と契約することになります。今後農地中間管理機構と協議をすすめるながら、統合一体化に向けた作業を進めてまいりますので、ご協力よろしくようお願い申し上げます。



## II 小麦

### 1. 令和元年産の小麦について

令和元年産の麦の生育は、10月から11月にかけて降雨が少なくほ場準備や播種作業は順調に進み、出芽・苗立ちも良好で、12月から3月にかけて気温が平年より高く推移したため、平年に比べて生育は早く進み、草丈は長くなりました。莖数も平年と比べてかなり多くなったものの、早い時期から減少し始め、成熟期の穂数は少なくなりました。4月上旬に寒くなり、播種が早かったほ場を中心に凍霜害が発生しました。5月は日照時間が多く、登熟は順調に進み、6月は周期的に降雨がありましたが、収穫作業は順調に進みました。収量については、前年度に比べ荷受け重量は増加しました。

また、令和元年度の小麦の品質評価基準（表-6）では、JAおうみ富士の農林61号がBランク、シロガネコムギAランクと評価されました。

表-6 令和元年産 おうみ富士管内の小麦の品質評価実績

年度	銘柄	タンパク	灰分	容積重	フォーリング ナンバー	評価
	基準値	9.7~11.3%	1.60%以下	840 g/ℓ以上	300 以上	
	許容値	8.5~12.5%	1.65%以下	—	200 以上	
令和元年	農林61号	10.4	1.62	832	373	B
	シロガネコムギ	9.8	1.52	821	396	A
平成30年	農林61号	9.9	1.63	826	393	B
	シロガネコムギ	9.9	1.43	811	350	A

※Aランク基準 : 基準値を3つ以上達成し、かつ、許容値を全て達成している。

※Bランク基準 : 基準値を2つ達成し、かつ、許容値を全て達成している。

※Cランク基準 : 基準値を1つ達成し、かつ、許容値を全て達成している。

: 基準値を2つ以上達成しているものの、許容値を達成していない。

※Dランク基準 : 基準値を全く達成していない。

: 基準値を1つ達成しているものの、許容値を達成していない。

### 2. 今後の管理

令和2年産は10月中旬から下旬にまとまった降雨があり、早播きするところは少なく、11月初旬に播種したところは、生育が進み、莖数が多くなっています。令和2年産小麦の評価基準をAランクとするため、以下の技術を徹底し、収量増大・品質向上に努めましょう。

#### (1) 排水対策

分けつ期の湿害は、莖数不足から穂数不足に至るとともに、根の伸長が不十分となって登熟期まで影響が及びます。そのため、減収だけでなく、品質低下につながりますので排水溝の管理を徹底して排水対策に努めましょう。

#### (2) 施肥

1月追肥以降は、生育を見ながら分施を基本に、穂肥、実肥の施用時期、施肥量（表-8）を調整します。（全量基肥体系）また、評価基準をAランクにするためには、小麦のタンパク質含量と容積重を向上させるために開花期頃に行う「実肥」が重要です。

実肥の施肥については、小麦の現地農談会でご説明します。

表ー7 穂肥・実肥の施肥時期・量

品 種	穂肥 1 回目 【2月上旬】		穂肥 2 回目 【2月下旬】		実肥 【4月中旬】 開花期	
	農林61号	NK-C20 高度化成 444	20kg 30kg	NK-C20 高度化成 444	10kg 20kg	NK-C20 高度化成 444 尿素
シロガネ コムギ	NK-C20 高度化成 444	20kg 30kg	NK-C20 高度化成 444	15kg 20kg	NK-C20 高度化成 444 尿素	20kg 20kg 10kg
品種共通	麦笑	40～50kg				

品 種	穂肥 1 回目 【2月下旬】		穂肥 2 回目 【3月上旬】		実肥 【4月下旬】 開花期	
	ミナミノ カオリ	尿素	8～10kg	尿素	8～10kg	尿素

### Ⅲ 大豆

#### 1. 令和元年産大豆生育概況

梅雨入りが6月26日と平年より遅く、播種作業は順調に進んだものの梅雨入り後断続的に降雨があり、播種作業の遅れたほ場が見られました。TAC等を通じ、播種が遅れている場合の対応等をまとめ、7月上旬に周知致しました。適期に播種されたほ場では、出芽・苗立ちは良好で生育は概ね順調に進んだものの播種が遅れたほ場では、生育量が小さく播種時期により、生育の差が大きくなった。台風19号(10月12日)により一部ほ場で葉の損傷や落葉が見られた。昨年のような倒伏には至らなかったもの主茎長は短く、着莢数は少なく、やや小粒傾向となった。

#### 2. 今後の大豆づくりに向けた取組み

大豆については、「ことゆたか」と「フクユタカ」を中心とした作付が定着しており、今後とも作期分散と品質向上に取り組めます。特に畑作物の直接支払交付金単価(数量払)が検査等級により単価設定されていることから、外観品質である形質の向上に取り組めます。「ことゆたか」につきましても、耐倒伏性が強く、加工性にも優れていますが、裂莢しやすいという欠点があり、その欠点を補う「ことゆたかA1号」への転換をお願い申し上げます。品種特性等については、昨年には大豆生産者には通知させて頂いておりますが、収量的には増収が見込まれ、経営所得安定対策の数量払等にプラスに働き、所得の向上が図れると確信しておりますので、ご協力をよろしくお願い申し上げます。「フクユタカ」は、排水対策の強化と適期防除の励行、開花期頃の畝間灌水の実施による莢つきの向上と落下防止を図ります。

販売については全農しがとの契約栽培を中心に取組み、品質低下の要因となる汚損粒の防止のため朝夕の収穫回避に向けた啓蒙や、広葉雑草が多い圃場については刈取り時の草汁による汚損粒防止のため、後期除草剤散布など指導に取り組めます。

#### 3. 令和2年産大豆について

近年、豪雨による浸水、高温寡雨による干ばつが起り、播種時期が遅れたり、品質、収量に影響を及ぼすことから、状況に応じて深植えや畝間灌水を行ない、発芽不良を起こさぬよう注意が必要です。

#### IV 園芸作物

病気、害虫から守るに大切なのは、日頃から野菜をよく観察することです。葉や茎に色の異なる斑点やしみのようなものがないか、しおれたり生育が悪くないか、地際付近にも常に目を光らせましょう。病気が発生してしまっても、早期に見つけて、ただちに対処すれば被害は最少限に抑えられます。

表-8 野菜の病害

病害名	べト病	根こぶ病
野菜	ねぎ・たまねぎなど	白菜・キャベツ等
感染 発病の状況	葉に大型の黄白色の病斑が生じ、表面に白色のかびが生じます。 病状が進むと萎れ枯死します。	晴天日に葉がしおれ、曇天日には回復します。 根に大小不揃いのコブが多数できます。
原因	主に土壌感染で発病し感染源となり他の株に感染します。たまねぎの場合気温15℃前後で雨が多いと多発します。 また、4月以降に感染している株の周囲の株に2次感染し発生が拡大します。	排水性が悪い・地温が高い・酸性土壌であるなどがあります。
対策	発病した株は抜き取り処分します。 予防防除を中心に早期防除に努めます。 予防剤・・・ダコニール1000 1,000倍 6回以内 収穫7日前まで 予防・治療剤…ベトファイター顆粒水和剤 2,000倍 3回以内 収穫7日前まで。 ※水をはじくため、薬剤効果を高めるために必ず展着剤（アプローチBI・グラミンS）を併用します。	本作では病原菌の根絶は難しいため、発生したら被害株は早期に取り除きます。次作でアブラナ科野菜を作付ける場合は、ほ場を変えることが望ましいですが、難しい場合は、根こぶ病で登録のある薬剤を使用します。 フロンサイド粉剤 1aあたり3～4kg 2回以内 播種・定植前。



そうか病



ホウ素欠乏



根こぶ病

病害名	そうか病	(生理障害) とう立ち
野菜	じゃがいも	たまねぎ
症状	表皮が「あばた状」になり、中央がややくぼみ褐変してコルク化する病気です。	冬から春にかけて気温が高い状態で経過し、一定の大きさに育った状態で、寒さに1ヶ月～2ヶ月当たると花芽分化させる性質があります。とう

		立ちすると、開花するために養分を使ってしまい、球の肥りが悪くなります。(中生品種で多くみられます。)
原因	土が酸性から、アルカリ性に傾いてくると、多発してきます。	種を早くまきすぎた場合、暖冬で進みすぎた場合、肥大初期に肥切れした情况等
対策	基肥の石灰の施用を控えるとともに、粗大有機物(稲わら、落ち葉など、堆肥の主原料になるような粗大な有機物)は、発病を助長しますので、完熟堆肥を施用します。多発ほ場では、フロンサイド粉剤を植付前に1 aあたり3~4 kg施用します。	適期の植え付けを行い、追肥は早生や中生は2回、晩生は3回(目安として1回目は12月中下旬頃、2回目は2月上中旬頃、3回目は3月上旬頃)施用する必要があります。

病害名	生理障害(す入り)	生理障害(ホウ素欠乏)
野菜	大根	ブロッコリー
症状	内部の細胞がだめになり、スポンジ状の空洞ができます。	茎に褐色のかさぶたのような症状が出る。
原因	播種時期が8月等早いと成長期が高温となり根の生育(肥大)が早いため。肥料切れ、水分不足、収穫遅れ等	出蕾期に高温で花蕾の発達が早まる場合
対策	播種時期は、9月中旬頃。適期収穫。間引きする時も株間を広げすぎない。(25~30cm)	発生後の有効な対策はなく、無理な早播きを避け、ホウ素入りの肥料BMようりん等を基肥として与えておくことである程度の軽減は可能です。

表-9 樹木病害虫

病害虫名	アブラムシ・カイガラムシ	アメリカシロヒトリ
発生する樹木	ミカンなど	サクラ・カキなど
発生症状	新芽に発生し放置するとすす病(葉が黒くなる)の原因となります。	樹の葉を食べ尽くす毛虫。食べ尽くした後は樹から降りて他の野菜も食べます。
防除方法	アブラムシ 4月から5月 防除剤…スミチオン乳剤 1,000~2,000倍 5回以内 収穫14日前まで。  カイガラムシ 6月及び8月 防除剤…スプラサイド乳剤 40 劇物 1,000~1,500倍 4回以内 収穫14日前まで 葉の裏まで十分に散布	カキ 防除剤…スミチオン乳剤 1000倍 3回以内 収穫45日前まで  サクラ 防除剤…ジェイエース水溶剤 1500~2000倍 5回以内発生初期 年2回 1回目:6月上旬~7月中旬 2回目:8月上旬~9月中旬 散布の際は、巣を破るように散布

表－１０ 果樹の防除

果樹名	カキ、ミカン
防除方法	<p>落葉やせん定した枝を適切に処理し、病虫害の越冬場所を減らします。 鎌等を使って、古くなった粗皮を削りとること。害虫の越冬場所を減らすことにつながります。</p> <p>越冬病虫害に効果のある薬剤を散布します。</p> <p>みかんは、１２月下旬～１月中旬、又は３月に散布します。</p> <p>かきは、１２月下旬に散布するか、芽の動きだす前に散布します。</p> <p>防除剤…トモノール（マシン油）機械油乳剤 95（カイガラムシ類、ハダニ類、サビダニ）</p> <p>みかん（かんきつ） 冬期 30～45倍 夏期 100～200倍</p> <p>かき（落葉果樹） 16～24倍</p>

注意点 散布時期が遅れると薬害につながります。

※劇物の購入には印鑑が必要です。また劇物の配達はできません。

※代表的な薬剤を掲載しております。

※農薬のお問い合わせは、営農経済部、野洲、中主管農センター営農購買課にご確認下さい。

表－１１ ２～３月の野菜作業ポイント

ポイント	春にんじん	じゃがいも
	<p>3月下旬頃に播種します。過度に早播きするととう立ちします。</p> <p>発芽させるため十分に灌水を行ない光好性のため土を軽く被せます。本葉が3～5枚時に低温にあると花芽ができてしまうので、早播きするときは、トンネルで保温します。肥料施肥は基肥を6割・追肥を4割とし追肥は間引き直後の1～2回とします。</p>	<p>3月下旬、あまり早植えすると遅霜に当たって地上部が枯れてしまうことがあるので、早植えは避けます。</p> <p>また、保温効果や倒伏防止、実が直接日光に当たらないように土寄せを行います。土寄せは追肥施用のタイミングに行います。</p>
ポイント	イチゴ	春キャベツ
	<p>3月になったら雑草の発生と果実の汚れ防止のため黒マルチをします。マルチは降雨後に実施すると水分保持ができます。</p>	<p>3～4月に定植すると6～7月上旬に収穫できます。収穫適期が短いので作りすぎは禁物です。（裂球しやすい）</p>

### 夏野菜の栽培

- 野菜の多くはPH6.0～6.5の弱酸性でよく育ちます。ほうれんそう、葱類はやや高めを好み、さつまいも、じゃがいもなどのイモ類は酸性を好みます。日本は雨が多く、石灰の流亡により酸性土壌が多いため、作付ごとに石灰を施すことで適正PHを維持できます。石灰類の施用は100g/1㎡とし、酸性土壌を好むイモ類は半分程度を施用します。
- 夏野菜の収穫を長く楽しむには、地力をつけます。堆肥などの有機物を施用します。

2 kg/1 m<sup>2</sup>が目安です。未熟な堆肥は生育不良を招くので、完熟たい肥を施用するか、植え付け行う1ヶ月前に施用します。

- 排水を良くする為、ほ場周りに排水溝を掘るか、高畝にして排水性を確保します。
- 連作を防ぎます。トマトとじゃがいも、なすなど同じ仲間の野菜が植わっていないところに植え付けるようにします。
- ほ場が狭く、どうしても連作となる場合は、接ぎ木苗などを活用しましょう。
- 種子を発芽させるには、水・酸素・温度・光の4つの条件があります。また野菜の中には、発芽の際に光を好む好光性と逆に光を嫌う嫌光性があります。1つでも条件が揃わないと、発芽不良や徒長苗の原因となります。また野菜には播種の適期や適温がありますため、播種前には確認しましょう。
- 夏野菜は初期の生育が早く、微量要素が不足し欠乏症がおこりやすくなります。特にカルシウム欠乏症は、トマト・ピーマンの尻腐れの要因となりますため、「畑のカルシウム」を併せて施用し欠乏症を防ぎます。

### マルチシートの種類と役割

主に雑草の抑制や地温を上げるために使用するマルチシートですが、その種類は多くまた雑草の抑制効果や地温を上げる効果は様々です。そのため、作付時期に併せマルチシートを使い分けることが重要です。

表-12 マルチシートの種類と特徴

種類	機能と特徴	効果的な作物と作付時期	地温向上効果	雑草抑制効果
透明マルチ	光をよく通し、地温を上げる効果が非常に高いですが、反面雑草を抑える効果は低いです。 気温が低く、地温をしっかりと上げたいときに最適です。	11月に植え付けるたまねぎ、3月上旬～下旬に植え付けるじゃがいも、さといも、種をまくだいこん、にんじんなど。	非常に高い	非常に低い
緑色マルチ	地温向上効果と雑草抑制効果は黒色と透明の中間に位置します。 地温を上げつつ雑草の対策を行う時期に向きます。	4月上旬～中旬にまくとうもろこし、えだまめ、いんげんなど。	高い	低い
黒色マルチ	緑色より光を通しにくく地温は上がりにくいですが、雑草を抑える効果は高いです。 地温を上げつつ旺盛する雑草を抑えたい時期に向き、汎用性が高いです。	4月下旬～5月中旬に植える果菜類、5月中旬～6月中旬に植え付けるさつまいも、9月中旬～下旬に種をまくだいこんや植え付けるレタスなど。	やや低い	やや高い
銀色マルチ	光を反射し地温が上がらず、雑草を抑える効果が高いです。 また反射光を嫌うアブラムシやアザミウマ類の忌避効果があります。	8月下旬～9月上旬に種をまくだいこんや、植えるレタスなど。	低い	高い